

国際シンポジウム 『学校と地域社会のより良い連携を目指して —日本と西アフリカの対話—』

An International Symposium: Working Towards Stronger Cooperation Between Schools and
Local Communities: A Dialogue Between Japan and West Africa

2013年5月15日(水)に、本学教育研究所と国際協力機構(JICA)の共催で、三鷹市教育委員会後援によるシンポジウム「学校と地域社会のより良い連携を目指して—日本と西アフリカの対話—」が、本学の東ヶ崎潔記念ダイアログハウス内国際会議室にて開催された。このシンポジウムは、三鷹市と西アフリカの3カ国(セネガル・ブルキナファソ・ニジェール)が、積極的に地域住民が参加する学校運営の課題や、今後の展望を共有することを目的とした。

本学日比谷学長による開会の挨拶の後、2004年より開始され、現在西アフリカ4か国に対象地域を広げているJICA「みんなの学校プロジェクト」の概要について、原雅裕氏(元プロジェクト・チーフアドバイザー・現国際協力コンサルタント)からご説明いただいた。

次に西村幹子上級准教授の司会によるパネルディスカッションが行われ、原氏に加え、三鷹市教育委員会員ノ瀬滋委員長、ブルキナファソ国民教育・識字省、グアバガ・ウィンソン・エマニュエル事務次官、セネガル共和国国民教育省、リー・ババウセイ事務次官、ニジェール共和国国民教育・識字・国語推進省、ムサ・ムムニ就学総局長が登壇した。1. それぞれの国において、地域がどのように学校運営に参加しているのか、2. 学校運営に地域が参加することで何が改善されるのか、3. 今後の学校と地域住民との関係はどうあるべきか、という3つの問いに対して、それぞれのパネリストが順番に答え、パネリスト同士の対話、そして来場者からの質疑応答も行われ、率直で真摯な意見交換が行われた。

主な議論のポイントとして、学校という場の学びの妥当性を3つの側面(国家の基準、地域のニーズ、子ども自身の成長)から捉える必要性(そして、それらは相互協調的なだけでなく、相互矛盾、排他性を帯びることもあることの認識)、さまざまなアクターのコミュニケーションや連携の重要性(特に、地域と学校だけでは解決しない教員の待遇、学校の配置、言語カリキュラム等の教育システム、政治状況に関する行政との連携等において)、文化・歴史に配慮した地域と学校の関係の模索の必要性(例えば、学校と地域関係を代表する表現として西アフリカ諸国では地域の不信感、日本では権威という象徴的な言葉が使われた)などが挙げられる。

最後に、JICA人間開発部萱嶋信子部長による挨拶によって幕を降ろしたこのシンポジウムには、内外問わず100名を超える来場者が訪れ、アフリカや地域参加の学校運営に対する関心の高さが伺えた。

西村 幹子
NISHIMURA, Mikiko